
規格外の行く道（仮）

楽隠居

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

規格外の行く道（仮）

【Nコード】

N9490Z

【作者名】

楽隠居

【あらすじ】

最初東方に行つてからだいたいのところで別世界に行きますが、しばらく東方になると思います。間違い、指摘、気になる点がありましたら感想の方に書き込みお願いします。

プロローグ（前書き）

自分の勢いで書いてしまったので駄文だと思えます。

こついう小説が苦手な方は閉じるボタンでウィンドウを閉じていただいても構いません。

プロローグ

ここは何もない空間、そこに一人のジジイが座っていた。

「さて、こいつはいつになったら起きるのかのう」

俺はその言葉に気がつき、体をひねった。

「お、こいつようやく目覚めるのか」

「あ、あと五分」

ふう、全く、人の眠りを妨げやがって。

「いつまでもグースカ寝るんじゃない！はやく起きろアホ！」

野太い怒鳴り声と腹部への衝撃を感じ、俺は目を開けた。

「痛ててて、休日の朝くらい長く寝かせてくれても……」
「コ、コ、ド
コ？」

目を開けると見知らぬ光景、周り一面真っ白の空間だった。

「こいつは、そうじゃのう。神界の一部と想っとくれ」

俺の目の前のジジイは変な妄言を吐いた。つーかこのジジイ誰だ？

「妄言などではない！本当のことじゃ！それにワシ神様じゃし。」

は…？神様？おいおいいい加減にしてくれよ。全く、頭がボケたか。
「頭はボケてないわい！今のお前の体を見てもそんなことが言えるか？」

体？別におかしいとことか……ん？

「ええええええ！体がねえ！は？なぜに？Why!!」

え？マジ体無いんだけど。やべえよこの状況。

「ふう、ようやく自分の状況が理解できたかの？」

「どうなってんだこれ」

いや、マジヤバイ、本当にヤバイ。

「ふっふっふ。教えて欲しいかの？」

くそっ、なんか笑い方がむかつく。まあまず話を聞いてみるか。

「ああ。で、どうして俺はこんな姿なんだ？」

「ふむ。では教えてやろう。お前は死んだのじゃ。」

やっぱり俺は死んだのか。

「で、それから？」

「ん？なんかもつとこうリアクションはないのかのう？」「えええええ

「!まじで!」とか「嘘だろ。そんなの。」とか

「いや、だいたい分かるだろう体が無い時点で」

「いや、まあそうじゃが、でもリアクションくらい欲しい」で、それで?」「……………は?」

「いや、死んだのは分かったとして、もっとなんか有るだろ。死因とか、なぜここにいるとか。」

「話は最後まで聞いて欲しいのう。…で、死因じゃったか、それはまあ、こう自然の摂理から外れたような感じ」「早く言え」「わしが殺したのじゃ」

「まあ、そのくらいは予想できる」

「なら聞かんでよかったじゃろう」

「はっはっは。どういつ答えが返ってくるかと、つい。」

「はあ、もう疲れたわい。では話すとしようまず理由からじゃが、おまえ、アニメとか漫画が大好きじゃな?」

「ああ。」

「ワシ、神様の中でも最高神より上の創造神の地位での、暇だったんじゃ。」

「これまたなぜ?」

「うむ。ワシとても偉いじゃろ。それでいう、みんながワシの負担を減らそうとしてのう。最終的に仕事
が回って来なくなったのじゃ。」

「いや、自分でもらいに行けばいいじゃん。」

「何回かそうしたわい。でも皆が「私たちがしますので創造神様は
休んでください」と言ってくるのじゃ」

「まあそれは取りづらいな」

「そうじゃろう。それで暇になったワシは自分で仕事を作ること
にしたのじゃ」

そうなるとその仕事っていうのはやっぱり。

「それが俺、と」

「そうじゃ。最近おまえのいた世界では転生モノとかそのへんが流
行っておるじゃろ。」

「まあそうだが……ソユコト？」

俺に転生しろと

「うむ。お前の考えとる通りのことじゃ。嬉しいか、嬉しいじゃろ
う。」

「ああ、嬉しい。だが一つ聞かせてくれ。あんたはなぜ俺を選んだ

「？」

「ああ、そのことか。それはな、おまえの想像力が豊かで面白くなりそうだったからじゃ。」

「そうか。分かった。で、どこに転生させてくれるんだ？」

「ふっふっふ。それはのう。おまえの好きな東方の世界へ行かせてやる。」

このジジイ流石神様だ。

「マジか！やったぜ！で、で？俺はなんかもらえるのか？」

「うむ。いくつか特典をやる。それくらい自分で考えてもらっても構わんぞ。」

こいつ、転生の話辺りからテンションとかがガラツとかわったのう。

「少し規格外になってもいいか？」

「うむ。構わん。ワシ、創造神じゃから大体のことは出来るからのう。ただし、あまり強すぎるものは少し制限を掛けさせてもらっぞ。転生してすぐに暴走とかになったら話にならんしの。」

「ああそれで構わない。」

「マジで暴走とかそんなことになったらこちらも暇つぶしにならんからのう。案外人間を眺めるのも楽しいから期待しとるぞ。」

「分かっているつもりだ。」

……考え中……考え中……考え中……考え中…………終わり……

「この4つでいいののう？」

「ああ。」

「でも、この4つじゃ心配じゃからサポートとかワシと通信できる端末とかもオプションでつけとくからのう。」

このじいさん結構いい奴だな。

「サンキュー。で、これからもう出発か？」

「いや、まだじゃ。おまえには体とか名前がないじゃろ。それを今から決めるからのう。」

「そういえば体がなかったな、それに名前もおまえとしか呼ばれないな。」

「じゃからそこらへんの情報を決めるために、この人形に入ってもらうぞ。」

「このマネキンみたいな人形に？どうやって？」

「はいろつと思えば入れるはずじゃ。まあ試しにやってみい。」

いやいや、そんな曖昧な説明をされても。

「ごうか？いやごうか？くそっ、わからん。」

「入れんか？まあ長い間使ってなかったからのう。仕方ないから強引に入れてみるぞ。」

「マジでかって」グッググググググ

「痛い痛い痛い痛い痛いーいー！」ゴリユ！

「（嫌な音がしたのう…）；。ゝ。ゝ。ゝ。ゝだ、大丈夫かのう？」

「な、なんとか……………」

「（ふう。良かったわい）じゃ、じゃあこの端末に名前を記入してくれ。その他の情報はワシが書き込むからのう。」

「イテテ…ん？これでいいか？」カタカタカタカタツ カタンツ

「ふむ。まあいいじやろう。その他は後で設定紹介で紹介するからのう。しかし、名前が『神羅』、これでいいかのう？」

「いいだろ、別に」

「まあ基本的なことはワシがしておいたからいいとして。おまえは

どの辺に行きたいのじゃ？」

「どの辺って言うത്？」

「時代じゃよ時代。どのくらいに飛ばすか言ってくれ」

そうだな……。能力の確認もしたいから……。

「結構前の人がない辺りで頼む」

「分かった、でh「ちょっと待て。「なんじゃ？」

「俺はお前をなんて呼べばいい？お前の名前をまだ聞いてないんだが。」

「ふむ。そう言われてものう。名前などないからのう。お前の好きに呼ぶといい。」

「俺の好きに……。か。」

こいつあれだろう、神様だろ？で、俺を転生させるんだろ？ん？
転生？つまりは俺を新しく生み出すってことだろ？ってことはこいつは俺の産みの親？で、こいつジジイだろう？だったら呼び方は一つしかないな。よし！

「決まったかのう？」

「ああ。よろしくな、『親父』！」

「お、親父じゃと！なぜそうなった。」

「え？そりゃああなたは俺を転生させる、つまり、世界に新しく生み出すじゃないか。だからこそあんたは俺の親だ。という訳でよろしくな親父！」

「うむ。まあ好きに呼べといったのはワシじゃからなあ。まあいいじゃろう。」

「それじゃあ親父、転生よろしく。」

「うむ。それでは行くぞ。」

「ああ。」

さーて、地面に穴か？それとも扉か？どういつぶつにするんだ？

「ではっ！セイツツッ！！！」「ゴインツッ！！！」

「ウガアアア！」

な、なんとという力技。親父、そりゃないよ。ガクツ……。

「ふむ。それにしても親父とは、面白い奴じゃったのう。まあ、こいつがどうこれからを歩むか、見守るしかないのう。」

ブログ（後書き）

何処か誤字脱字があったら教えてください。

これから受験シーズンですので更新は受験が終わってからになると思います。

設定（転生完了時）（前書き）

主人公設定載せます

設定（転生完了時）

名前：創理つくり 神羅しんら

能力：「幻想と現実を司る程度の能力」

属性：中立・中庸 特性：矛盾・混沌

能力値（平常時） f a t e 風

筋力：C - 魔力：C +（気含む）

耐久：D 幸運：D +

敏捷：B 宝具：n o t h i n g

神様から貰った力

1・「幻想と現実を司る程度の能力」

2・武器

上の1の能力に沿った内容のアイテム。

鍵型の「幻想之主」と本型の「現実之書」

どちらもそれぞれの能力に沿っているので、

能力の端末としても使える。

3・改変・改造能力

何かに効果、属性を付加、追加したり、形状や特性を変えることが出来る。

4・世界樹の苗木

その名のとおり、世界樹の苗木、

5・神様からのオプション
身体能力や容姿、情報、助言、その他の設定等
「便利なものをいただいた。」

名前：親父おやじ

職業：神 神格：「創造神」

容姿：白く長い髭の老人

悩み：仕事がない、

欲しいもの：仕事

最近まで暇だったので、主人公のサポートをするときに

不意打ちをかけたります。それほどまでに退屈な生活をしていた。

暇なときは人間の生活を眺める等暇つぶしをしていた。

転生完了！（前書き）

今回も思いついたものを書きました。

転生完了！

頭が痛い……。

まさか転生の方法があんなだとは思わなかったぜ。

「くっそ〜、親父め、今度会ったら一発殴ろう。絶対に。」

ピロリロリ

俺がそんな感じの決意をしている時、ズボンのポケット辺りから音が鳴った。

そっぴや俺の格好を伝えておこつと思つ。一言で言つとジャージだ。

今の俺の格好は装飾のないただのジャージだ。そんなことはいいとして、俺はポケットの中から板のようなものを取り出す。

「なんか、スマホみたいだな。」

『おおっ！つながったつながった。ふいー、良かったわい。さて、つながったということは、おまえ、そこにおるじゃろう。』

親父だ。俺をぶん殴った親父だ。

「ああ。いるよ。」

『ふむ。無事に転生できたようじゃの。』

「転生する際に頭殴るってどういうことだよありゃ。」

『いやー。スマンのう、毎度お馴染み！みたいな奴じゃつまらんくなるじやろう。少しは別パターンでやってみんといかんじやる。そっちの方がワシ楽しいし。』

「ずいぶんと自分勝手だな、オイ」

このジジイやつぱアホだ

『ゴホンッ！では今の状況について教えようかのう。今の時代は人が最初に月に行く前………ではなく。そのヒトが人になる前位じゃ。』

マジか。それなら能力の確認をしやすいじゃないか。

『次に能力のことじゃ、おまえの能力に少し制限をする。最初の出力はせいぜい10%位じやのう』

「マジか、でもなぜ10%位なんだ？」

『おまえの能力はコントロールが完全になるまで数千年はかかるじやろう。それにおまえの魂、存在自体に刻ませてもらったからのう、馴染むまでに時間がかかると思うぞ。』

「そうk『それに』ん？」

『今のおまえには能力の出力的に1,2%位しか操れん、あまり大きなことをすると暴走するかもしれんからのう。まあ、頑張るしか

ないのう。』

「仕方がない。ま、どんなことができるか確かめるしかないか。」

『あ、それとお前は能力がまだコントロール出来てないから練習のために数百年不老にする腕輪が何かを送るからのう。』 ピッ

「切れた……………」

さて、アイテムを送るって言ってたがどこから来るんだ？

ヒュウウ~~~~ン

空から何か落ちてくる音！上か！

俺は顔を上げる。すると空から袋が落ちてきた。ふむ。あれか。

しかし俺が袋を掴もうとしたとき、下から何か俺の顎に高速でぶつかった。

「ガフツ…くそ…お…やじ……………」

箱のようなものが当たったようだ。しかしそこで俺の意識は途切れた。

ただひとつだけ言わせてもらう。意識が途切れる前にチラッとみえたクソ親父のニヤケ顔のイラストはとてつもなく……ウザかった。

転生完了！（後書き）

もう一話いけるかな？

能力確認

くそう、頭がグラグラする……。

「あのクソ親父め……。」「

俺は顎をさすりつつ俺を二度も気絶させたクソ親父の顔を思い浮かべていた。

そういえば何か送るって言ってたな。

「この袋か？」「

俺は端末をポケットに入れてから袋の中を探った。

「なんだこれ？」「

その中に入っていたものは親父が言っていた腕輪と手紙だった。

まあニヤケ顔のイラストは置いといて

「えーと、なに」「

『この手紙を見ているということは目が覚めたようじゃのう（笑）』

親父が気絶させたくせにこの冒頭はムカツク。

『まあ、ワシはここから見ておるから起きたことくらい分かるがのう。』

クソ親父。全部見てるのか。余計にムカツク。

『まあそんなことはさて置き、中身の説明をするぞ。その腕輪おまえの老化を数百年止めるものじゃ。』

その間に能力の修行をするといい。その間に人間が知能をもつじやろう。あと多分能力が馴染むまでに

数千年かかると思うんじゃ。その間はコントロール出来ても30、40%までじゃろうな。それと最後

に、忘れておったが「世界樹の苗」だったかのう？あれはお前の近くに鉢に入れておいとるからのう。

あの苗は普通の木の大きさになるのに数千年かかるぞ。まあ育つてくるとその木からマナが発生するか

ら育ち具合が分かるじやろう。そこまで育つとほかの木と同じ位の速度で育つようになるじやろう。』

ふむ。まあまあ分かった。つまり俺のすぐそばのこの鉢が世界樹の苗、と。

「よし。今調べても仕方ないからな。とりま、能力確認しますか。」

親父から貰った能力は「幻想と現実を司る程度の能力」、俺が何故

この能力にした理由は応用が利くから

だ。幻想と現実をということは自分の想像つまり幻想を現実に持つてくること。簡単にいえば「具現」

や「実現」だ。これが出来るからこそ俺はこの能力を選んだ。解釈の仕方によるが「だいたいのこと」が

できる能力「極端にいうと」なんでも出来る能力「なのだ。

しかし、俺はまだコントロールが出来ないのでまずはそこからだ。

「よし。まずどこまで出来るか試さないとな。」

そう言い俺はまず棒を想像する。

「実現」

そうつぶやくと自分の手の中に1mくらいの木の棒が現れた。

「ふむ。」

と言って握ると、ポロポロと砕け始めた。

「まだまだか。」

このあと数十年くらいこつこつという修行が続いた。

早い進化

能力の修行を始めて200年ほど経った位の頃。俺は違和感を感じていた。少し前にヒトを見たんだが、

土器を作っていたり、竪穴式住居みたいなものを造ったりしていた。

「あまりにも進化が早すぎるだろ」

そう。俺が修行している間にヒトは知能や言語をもち、急激に進化していた。

ジュジュッ

ん、この機械音は……。親父。久しぶりだなあ。

『久しぶりだのう。元気にしておったか。』

「親父、久しぶり。と言いたいが……………」

『うむ。おまえの言いたいことは分かっている。人間の進化の速度じゃろっ…』

「ああ。いくらなんでも早すぎるだろっ。」

『そのことじゃがのう。何らかのきっかけがあったんじゃろっ。1つの発見でも色んな選択肢が生まれ

るからのう。』

「まあある程度したら少し会いに行ってみるか」

『まあ対応としてはそれでいいじやろう。それにしてもおまえ、少しは能力のコントロールが出来るようになったようじゃのう。』

「ああ。棒とか球みたいな単純なものは完全に具現化出来るようになったぞ。」

『ふむ。おまえも進化が早いのう。出力としては15〜20%ってところかのう。』

「ま、そのくらいだろうと思うよ。でも刀とかは失敗しやすいけどな。」

『まだ武器類は難しそうだのう。』

「ああ、そのへんなんだよ。まだ芯の部分かな。」

『ふむ。そのことじゃったら簡単なことじゃ。おまえは今まで普通のもの、見本通りに作ろうと思っとう。じゃが、それが原因なんじゃよ。』

「普通のものを作ろうするのが悪いのか？」

『いやいや、悪いとは言わん。ただのう、その価値観に縛られすぎるとるのじゃおまえは。その能力はお

まえの、おまえだけの能力じゃ。ワシはそうなるようにおまえにそ

の能力を渡した。言ったじやろう、

おまえの《存在自体》に刻んだ、と。基本は大事じゃが、それじゃああまりにもつまらん。応用するこ

とこそその能力が活けるとこじやろ？まあ何かのマネをしていたから暴走しなかったのじやろう。しか

し、少しは別の方向性で作ってみてもいいと思うぞ。改造能力もおまえにやったじやろう。少しは使っ

てみるんじや。自分の幻想をそのまま形にするそう思っているじやろう。』

「自分の幻想を形に、ねえ。」

やってみますか。そう思い想像する。まずは鉄の棒。

鉄の詳しい構成など要らない。ただ単に鉄であれ。脆くない。ただ硬い鉄であれ。

実現

すると俺の手の中には黒い棒が1本現れた。

『どれ、貸してみる。……ふむ……ふむ。完全な鉄……じゃな。』

なんじやろう、鉄は鉄で間違いないのじやが、この微妙に含まれる物質が分からん。

まあ気にせずともいいじゃろう。いまは完全に成功したことを喜ぶべきか。

『よくやったのう。他に何か感想はあるかのう？』

「ああ。自分の幻想を形にすることのコツは分かった。だが他の物も出来るかどうかを試したい。」

『いくらでも試すといい。時間はたっぷりあるからのう。』

こいつ、進歩が早いのう。この速度じゃと物体以外もいけるかもしれんのう。

それから俺は同じようなことを繰り返した。

このとき、俺は自分の能力の凄さを改めて感じた。

しかし、この後の俺は集中のしすぎでまた気を失うのであった。

早い進化（後書き）

こんな感じの長さで上げていきます。

情報収集

親父にアドバイスを受けてからこれまた2000〜3000年が経った。

最近の人間の進化、発展は凄まじく、100年前くらいから、移動手段が機械類になったようだ。

ちなみに俺はというと、山奥の洞窟に拠点をつくり4000年くらい暮らしていた。たまに人間の様子を

見に行くが、行くたびに服装や乗り物の形が変わっているのには驚いた。

あれ？俺の時間の感じ方。おかしくないか？

そして最近は人間以外にも人型だったり狼型？の所謂妖怪、らしいものも増えてきた。

いや、昔もいたよ。3000年くらい前も、でもあの時代、まだ妖怪の方が知能が低くてね。

意思疎通がしづらかったんだよ。でも最近言葉を話す奴も出てきたようだし。今度喋りに行った方がいい

いか。ずっと能力の修行してたし。

能力の修行、と言えば。俺の能力、大体のことはできるようになってきた、と思う。

あと、ずっと放置してた世界樹の苗木が大体1mより低いくらいになった。そして何か粒子を少し出し始めた。

めた。これが マナ だと思う。

そうそう能力の方だが、武器は大体出来る。が、光学兵器とか複雑なものは思い浮かべづらいから実現

しづらい。原型があれば後はどうとでもなる。そういうものだからこの能力。

しかし、妖怪、か。人間も街の外側に何かの柱を建て始めたからなあ。

仕方ない。一度人間のところで情報を集めるか。そう言いそこらへの街より一回りも二回りも大き

い、まさに“都市”と呼べる場所の近くに

「やって来たわけだが。」

どうするかね。今まではその辺りの近場の街を見て回っていただけなんだが。

こんだけ大きいと警備が厳重だろうな。

今までの街は割りと自然が多く、観光地みたいなくところだったのであるうほど外からの客が多く、大体

のことは人ごみに紛れて誤魔化せたんだがなあ。

今見ている都市は周りを高い壁で囲み、関所があるほどの都市だ。いかにも重要拠点だとか、偉い人い

ますよ。とか、すべての中心ですよ。みたいね感じで、中心部にはかなり高いビルがある。

「本当、進化しすぎだろ。」

仕方ない。ちょっと面倒だが、能力で切り抜けるか。

(想像するのは自分。誰にも見つからない自分。ただの空気と変わらない自分。)

実現

「ふう。」

これで周りと同化したはずだ。

今回は空気と変わらない自分なので、一応気体になれる。

が、長く気体のままだと戻るのに時間がかかる。だからギリギリ3秒……位が限界だと思う。

さて、潜入開始。

まず、関所のゲートだが、門に走っていき、開くタイミングで気体

へ。

そうすると他人はただの風としか思わない。

抜けたらすぐに実体に戻る。これで中に入ったのだが。この後どうするかねえ。

.....移動中.....

という訳で、偉い人がいそうなビルの中にやって来ました。

みんなは全く気づかない。まあそうだろうね。

仕方ない、親父に通信してみるか。

.....ピッ

「親父ー。久しぶりー。聞こえてるか？」

『おお。聞こえておるぞ。久しぶりじゃのう。そっちからかけるの初めてじゃのう。』

「ああ。聞きたいことがあるんだが。」

『その事じゃろっ？任せておけ。』

.....情報伝達中.....

「ありがとな。親父。」

『よいよい。ではのう。』 プツッ

親父から情報を貰った後、それを元に情報を集め、また中心のビルに戻っていた。

「さて、後は大きな情報でもとってきますか」

出会い

それにしても広いな、ここ。

情報収集に来た俺は、都市の中心のビルの中で迷っていた。何故かという。

「同じような部屋ばっかだな。」

そう。内装が同じような部屋が沢山あるのだ。まるで仮眠室のような部屋が。

ただ仮眠室となると、何らかの研究をしている施設も兼ねているんじゃないかと思う。

機密の情報や研究のデータは外に出したくないだろうからな。

多分だが、ここは研究機関と政治、役所を兼ねている、まさに中枢なんだろう。

少し難しいだろうが、何らかの機密情報が得られそう。

「虱潰しで探すしかないか。」

そう思いつつ俺は行動を再開した。

当たり前なんだが、すれ違う人々は俺に気付かない。弱い風を感じる位だろう。

休憩室から、倉庫、トイレ、会議室、ホール、お偉いさんの執務室まで一通りまわってみた。

「ん？この部屋はなんのための部屋だ？」

もう一通り見てまわったところ、俺は誰か個人の部屋の様な所を見つけた。

「ここ…は、誰の部屋だ？」

このビルのなかで一人部屋か？だとするととんでもない人物だな。

「何か資料はないか？」

俺は本棚辺りから調べ始めた俺は、その後、机の一番下の引き出しに入っている封筒を見つけた。

「これは？」

封筒の中の紙に書かれた文字を見ると、

「妖怪対策と月への移住計画について？」

これはどういうことだ？妖怪対策？何故その必要が？

そう。俺はする必要が無いと考えているのだ。

妖怪はまだ弱すぎる。ここまでの技術力を持った人間達ならば、なんの問題もないように感じるからだ。

そもそも妖怪は人の感情から生まれる。恐怖や不安が主だろう。

その程度なら別に脅威にはならないんじゃないか？

と、俺が考えていると、後ろから誰かが部屋に入ってくる音がした。

その人物は入ってきて最初にこう言った。

「あら、そこにいるのは誰？」

声から察するに、女性のようだ。

「ッ……！」

俺に気づいたのか？いや、普通気付かないはずだ。

今の俺は、空気と同じレベルの、有って当たり前、居て当たり前の認識のされ方をするのだから。

そう思っていると、その人物が言った。

「私の部屋で何をしているの？あなた、ここの人間じゃないわね。」

どうやら俺は完全に気づかれていたようだ。仕方ない。

俺は能力を切り、姿を現す。

「あら、見ない顔ね。まあいいわ。それよりここで何をやってたの？」

あなたが手に持っているものを見ればひと目で分かるけど。」

この女性には敵わんか。状況的に見て、警備を呼ばれると面倒だ。

正直に話してみるとしよう。場合によっては交渉できるかもしれないからな。

ただまず、俺の気になる点が一つある。

「お前、どうやって俺に気づいた？」

俺が質問すると、目の前の女性は、そんなの簡単よ。と言って、

「これよ。」

と一言、こっちに何かを見せてきた。手のひらに収まる程度の端末だった。

端末の画面には2つの点が映っていた。ま…まさか。

「なんだこれは？」

俺は一応聞いてみる。すると女性は

「ただの感知器、センサーやレーダーの一種よ。試作品だけどね。」

そう言った。だがそれだけで分かるものなのか？

「なぜそれだけで分かった？」

俺は再度聞く。すると女性は。

「まあね。でもこれは試作品、ちゃんと動作するかわからなかったんだけど。」

この部屋に入ったときに反応があったの。生命反応がね。

それに私が「何してるの？」って聞いたとき、あなた動揺したでしょ？

そのときは心拍センサーに反応があったわ。それでもうほとんど確定。でも部屋に入った最初から

分かっていたわ。だって私の部屋に勝手に入る人がこの都市の中にいるわけではないもの。

入った時点で重罪だしね。」

この女性には絶対に敵わんな。そう思っていると。

「それより、あなたがしていたことを説明してくれるかしら。」

仕方あるまい。

説明中

「なるほどね。まあいいわ。」

ん？こいつ、今何と言った？

「お前、通報しないのか？」

「ええ。それとも、通報して欲しい？」

「いや。してもらわない方が助かるが、いいのか？」

「いいのよ、あなたは私が捕まえたのだから、その扱いも私の自由でしょう？」

まあそういうことなのだろうが、大丈夫なのか？

「そんな事して大丈夫なのか？お前の立場的に。」

「大丈夫でしょう。ここで私に意見できる人はそんなにいないわ。」

こいつ、それだけの立場なのか。

「そんなことよりあなたの名前は？」

名前だと？

「あなたの名前よ。なんて呼べばいいか分からないじゃない。」

そういうことか。

「神羅だ。創理 神羅。」

「そう。神羅ね。それで、あなたがどうやってこの都市に入ってきたのか教えてくれるかしら。」

「ちょっとまってくれ。俺はお前の名前を聞いてないんだが。」

俺はこの女性の名を聞いていない。だが、女性の容姿を見るに、誰かは分かってしまう。

「私？私の名前は?????。」

……聞き取れないかしら。ならこっちの名で呼んで頂戴。私の名は」

この、半分赤、半分青の服装。そして銀色の髪を後ろで三つ編みにして束ねているこの女性。

この容姿から推測出来る人物、未来では月の頭脳と呼ばれ、蓬萊の薬を作った、

東方projectの原作登場人物。その名は

。

「永琳。私は八意 永琳。皆からはそう呼ばれているわ。」

これが俺と原作登場人物の最初の出会いだった。

質問（前書き）

今回かなり強引になってしまいました。

質問

俺は永琳と出会い、潜入方法を説明した後。自分の能力を教えた。

「なかなか興味深いわね。あなた。」

永琳はそう言った。

「こんなに何かに興味を持ったのは久しぶりだわ。」

永琳はこう言うが、いったい他は何に興味を持ったのだろうか。

永琳は人間の中の天才と呼ばれる中でもトップクラスの頭脳を持っているようだ。

そんな彼女が興味を持つものとはいったいどんなものなのだろうか。

「あら、何か気になることでもあるの？」

そう考えていると、永琳が話しかけてきた。

「お前は心が読めるのか？」

俺は何も喋っていない俺に対して、心を読んでいるかのような発言が気になった。

「いいえ、読めるわけじゃない。表情で分かるのよ。今まで何

千、何万人と腹の探りあいをしていてから。」

そういうものなのか？

「そういうものよ。そんなことより聞きたいことは？」

そういうものか。ひとまず聞いてみるとしよう。

「お前みたいな天才が興味を持つほどのものがそんなにあるのか？」

俺は自分の疑問をぶつけた。

「そりゃあるわよ。昔から代々続く家系に不思議な力があつたりとか、今の人間の進化のきっかけとか。」

なんか両方気になるな。

「不思議な力？」

「ええ。その家の人は代々不思議な力を持っている人がいるの。その人のいる地域の時間の進み方が早くなったりするみたいない感じで、まるで時間の感じ方が範囲の外と違うようになるみたいなの。」

それで一部の進化が早いのか？

それにしても時間だけあつてもなあ。

数百年間生きているんだが、外部から技術が入ってきていたのか？

「なあ、ここの技術は誰が発展させているんだ？」

「私よ。ここ、そうね、外の時間では200年くらいかしら。まあ私が生まれて少しからはね。それ以前は道具によって発展したらしいわ。」

「道具？」

「ええ。一番昔で言うと、鉄製の棒とかかしら」

棒？それってまさか

「後になってくると色々形が変わっているものも発見されているけど。」

色んな材質のものだったり、見つかるたびに解析したり、用途を考えたりしてるわ。」

親父、異常な進化の背景には、俺の能力の修行があったようだ。

「なあ。ここの時間の流れは外の何倍なんだ？」

「時間？そうね、100倍以上かしら。」

となると、俺の修業中500年ほどで50000年以上か。

ずいぶん長いな。

そう思っていると永琳は

「でももうすぐその時間の進み方は変わるわ。その力をもった人が
少なくなってきたの。」

私はその力を研究して、極限まで老化を止める薬をずいぶん前に開
発したわ。

でも、飲んでくれなかったわ。自分達が研究されている感じが嫌っ
て言うてね。」

それに、と永琳は続ける。

「最近以外の妖怪が増えてきて、力が強くなっているようなの。」

それに対し俺は

「でも今の技術力でも十分対抗できるだろ？」

「ええ。でも妖怪は数が少ないかわりに生命力や力が私達とは比べ
物にならないの。」

そして私たちが進歩するように、向こうも進化するの。

だからこそ私は結界を作ったわ。こちら側に妖怪がこないように。」

それでも俺はそこまでする必要がないと思った。

「そこまでする必要が本当にあるのか？」

「普通の妖怪には必要ないわ。でも時々力が飛び抜けた個体もいる
のよ。」

知能は低いんだけど。その分凶暴だね。街の中に入ってきたこともあるわ。」

もしかして街の周りのあの柱は結界のためのものか？

しかし本当に気になるのはあの資料の計画だ。

妖怪と何か関係があるのか？

「なあ。月に行く必要があるのか？月って石だらけじゃないのか？」

「月？ああ移住計画ね？あれは私たちの都合よ。私たちは寿命があるじゃない？

最近は穢れというものが寿命の原因があるように考えられているわ。

その穢れが地上に溢れているから、穢れない月に行こうって話よ。

それに、人間の技術力を使えば月くらいすぐに住めるようになるわ。」

「そのあとの街はどうなる？」

「破壊するわ。跡形もなく。」

「そんなことしたらこの星が大変なことになるぞ。」

「仕方ないじゃない。ここの技術を妖怪たちが使わないようにするだけよ。」

私たちも必死なのよ。人間全体を考えるとね。」

まあそう考えると納得できなくはないが……………。

「これで計画の基本的なことを話したわ。

この話はここでお仕舞い。あなた、今日はここに泊まっていけばいいじゃない。」

まあこれ以上話しても変わらないか。

「ああ。そうさせてもらおう。」

俺はそう言い、一日を終えた。

質問（後書き）

強引で本当にすみません。

移住（前書き）

時間が少し飛びます。

移住

俺は今、都市の中心のビルの一室にいる。

時間軸的には永琳と出会って200年以上経っただろうか。

人間が月に行くのは数日後だろう。

そして、親父からもらった腕輪に最近ビビがはいつてきた。

そんな時、俺は何をしているかというと。

「うーん。まだ厚いか？」

能力であるものを作ろうとしていた。

「それにもっと広くしないとなあ。」

俺が作っているもの。それは

「もっと硬いものじゃないと盾にはならんな。」

そう。盾である。それも結界を応用したものだ。

もちろん普通の盾くらいは作れる。

しかし俺が今作ろうとしているものは攻撃を反射する仕様のものだ。

そのための盾の形を作るのだが、できるだけ膜のようなものをつくるつもりだ。

出来るだけ薄くし、見えづらいものを作りたいんだがなあ。

「難しすぎる……………」

これ、完成するの？

そう思っていると後ろから永琳が、

「あら、まだやっているの？よく飽きないわね。」

と言う。

「永琳。来てたの？」

「今さっきね。そんなことより、私たちはもうすぐ月にいくんだけど、あなた、本当に残るの？」

永琳が来た理由はそれか。

そう。俺は月には行かない。

そもそも俺が行く必要性を感じない。

誰が好き好んで岩だらけの場所に行くだろうか。

「そう言うなら仕方ないだろうけど。私たちが月に行くときは気を付けて。」

都市と街、全部爆発するから。」

まあそうしたら妖怪は結構死ぬと思うけどね。

まあ一つ不安なのは妖怪なんだけどね。

何か最近妖怪が活発なんだよな。

月に行く際には一箇所に人が沢山集まるから

妖怪が誘われてきそうなんだよ。

人の多いところに沢山現れる節があるからなあ。

「まあ都市から離れていれば大丈夫と思うわ。」

まあその時はそのときだな。

そして、移住前日。

人間の全員がこの都市の内部に集まった。

ついに明日、出発か。

「明日、か。」

俺は今都市から離れていた。

「それにしてもやっぱり大きいな。」

都市は俺が来た時より1回り大きくなっていた。

しかし、長かったな。

それにもう親父からもらった腕輪が碎けそうだ。

嵌めているところが痒い。

そう思っているよ、

ミッパッパッ。

という音が鳴った。

なんかひさしぶりだなこれ

と思いつつ端末を見る。

『おお。久しぶりじゃのう。おまえ、ワシのこと忘れとったじゃろ
』

いやー、まあ間違っではないな。

「親父、なんでこのタイミングでかけてきたんだ？」

『うむ。おまえに送った腕輪がそろそろ外れる頃じゃとおもっての
』

「まあ碎けそうっちゃ碎けそうなんだが。」

『それ、碎いてもよいぞ。』

「は？」

『いや、それ、碎いていいぞ。その腕輪が能力のストッパーなんじ
やが。もう必要ないじゃろ。』

「そうだったのか？」

『うむ。外したらもっと自由度が増すじゃろうし。今のお主じゃったら大丈夫じゃろ。』

「そついうことなら……。」

ていつ　　パキッ

俺は腕輪を叩いて割った。すると、

……………ブワッ！

割った瞬間、俺の周りに風が吹いた

『外したことでもっと簡単に能力を使えるじゃろう。』

俺は自身の中に何かの力があるのを感じた。

『何かを感じるじゃろう？』

「ああ。しかし、なんだこの感じ。」

『それはあれじゃ、霊力や魔力じゃろう。』

俺がそう言った瞬間。

ドオオオオン！

という爆音が聞こえてきた。

移住（後書き）

適当になってきてすみません。

妖怪集結

神羅と親父が話している頃

都市近郊。

「よし。全員集まったか？」

そう言ったのは周りのやつより一回り大きい人型の個体。

「もう少しで集まります。」

そういうのは少し小さめの個体。

今ここへは数万の妖怪たちが集まっていた。

「そうか。向こうには気づかれるなよ。」

この妖怪を束ねている妖怪は集団の中でも長く生きている奴だった。

この妖怪は火の妖怪である。

人間は火の発見により暖をとり、厳しい冬をも越える術を得た。

加熱することも覚えた。また、金属の加工にも火が必要である。

しかし、火は大変危険である。すぐに人の命を奪えるものである。

故にこの個体は生まれた。仲間からは烈火れつかと呼ばれている。

そして長く生きていることで強大な妖力を得た。

「あいつらが油断している今なら行ける。」

そう。人間は油断しきっている。結界があるから安心しきっている。

そこを突くためにこの日を選んだ。

そして人間が月に行くという情報を得たものもいる。

例えば人間の社会が情報社会だとする。そこで、人を騙し嘘の情報を流す者が現れるとする。

そうすると誰かが引つかかる。そして、そのことに対して、怖いと思う人が増える。

そうなると情報や嘘に対する恐怖から新たな妖怪が生まれる。

だからこそ妖怪は増える。このようなことがある故に妖怪と人間は進歩し増えつづける。

妖怪たちは怖いのだ。今まで地上にいた人間が月に、自分らの知らないところへ皆で行く、

ということに。

そして残った我々はどうなるのだ、と。消えてしまつのではないかと。

だから妖怪も行動を起こした。人間が月に行く前に。

消えるかは分からない。でも、それでも不安なのだ。

自分らは何もしていないのに消えるかもしれない。ということだ。

この可能性に、理不尽に抗いたいのだ。

だからこそ襲う。襲わずには居られない。

そして、全ての人間に、人間の心に。

恐怖を。根源的な恐怖を刻むために。

妖怪たちはもう止まらない。その総てを持って挑む。

敵わないのは分かっている。しかしその事実には抗いたい。

何もせず消えるのは悲しいから。

腕が飛ばうと構わない。

足が飛ばうと止まらない。

妖怪たちはただ進む、死に絶えようとも進む。

別に恨みなどない、ただ魂が疼くのだ。

魂が人間を求めるのだ。

妖怪としての本能が叫ぶのだ。

人間の恐怖から産まれた故に。

血が欲しい。

肉が欲しい、と。

しかし思考の中心にあるのは生物としての本能。

ただの生存本能。

皆は同じ思いを持ち突き進む。

ただ一つの思いを持って。

ただ一つ。

消エタクナイ。

妖怪集結（後書き）

なんか微妙な出来具合になってしまいました。

戦闘

親父との通信を終えた後、俺はすぐに都市に向かっていった。

あの爆音、あれは外壁への攻撃だろう。

いくら外壁が頑丈であろうともあの大きさだ。きっと抜かれたのだろう。

そうでなくともかなり削れているはずだ。

内部の人間はパニックに陥るだろう。必ず。

そして月への移住を早めるだろう。

だが、パニック状態に陥った人達をうまく整理するのは難しいだろう。

そうしているうちに人が次々に死ぬはずだ。

更に妖怪が人間側の武器を使い始めたら最悪だぞ。

俺はそう言い、時間短縮のために、

新たな力、霊力を足に貯め始めた。

その頃の都市外壁部。

「殺せ、殺せ、殺し尽せ！逃げる奴ごと殺せえ！」

妖怪のリーダー格、烈火は見事外壁の破壊に成功していた。

（長年妖力をためてよかったぜ。）

烈火は心の中でそう思っていた。

ぶち壊した外壁から仲間達を送り込みおわった烈火だが、

勢いだけは止まらない。勢いだけは止めてはならないのだ。

基本的に数、戦力が違う自分達が負けるのは分かっていた。

それでも多く殺すためには勢いで進むしかなかった。

この奇襲とも言える襲撃で相手が混乱しているうちに削るしかないのだ。

最終的に死ぬのは自分達だ。それが分かっているからこそその行動だ。現にかなり殺した。一瞬のうちに数万。今もどんどん増え続けている。

向こうの兵にも数千程度削られたが、まだこちらが押ししている。

ならやることは簡単だ。暴ればいい。

そう思い俺は人間の大群に突っ込んだ。

「よし。」

足に靈力を溜め終わった俺は都市の方向、穴のあいた外壁を見た。

「いくか。」

俺は今から跳ぶ。

そう、跳ぶのだ。

少し小高いところにいる俺は、

「防御結界、想像、実現。」

そう言っつて、俺の前に盾を展開した。

これは速度に耐えるためである。

今足に溜まっている靈力を爆発させると、ものすごい速度が出るだろう。

それに耐えるためだ。

そして展開し終わった俺は、都市とは逆方向に足を向け、

靈力を爆発させた。

ものすごい速度で翔ぶ。

足が熱い。それは爆発させたんだ。熱いだろう。

そう思いつつ俺は足にまた霊力を溜め始めた。

もうすぐ妖怪達の上空だろうか。

そう感じた俺は足を空に向け、防御結界に霊力を込め始めた。

そして妖怪たちのちょうど上空の前あたりで

足の霊力をまた爆発させた。

そのまま俺は妖怪達に突っ込んだ。

烈火は焦った。

後ろの方に何かが落ちてくる音がしたからだ。

後ろは仲間の妖怪だけでこんなことができる奴が居ないと

知っているからだ。

もし挟み撃ちにあつたら自分らはすぐ負ける。

それは、それだけは避けたいのだ。だから戦力をひとつにまとめているのだ。

1対1にぶつかり合いなら互角以上で戦えるから。ただひたすら進むだけだから。

そうしてきたからこそ相手の屍も味方の屍も進んだあとしか残らない。

後ろから敵が来たら、戦力が分かれる。それじゃあ負ける。負けてしまう。

我らは妖怪。力だけは強い。

なら、嵐のごとく攻め、嵐のようにこの世を去ろう。

ただ吹き荒れる風のように。被害だけを残す天災のように。

だからこそ進む方向は1つ。

そう決めたのに。そう決めたのにッ！

なのに、なのにッ、なににどうしてッ！

俺は突っ込んだ。何も考えず。ただそこに。

そして結界を破裂させた。

周りは飛ぶ。妖怪が飛ぶ。

妖怪は俺を攻撃する。俺は避ける。ただそれだけ。

そして俺は想像する。

武器を。こいつらを殺す。ただひたすら生命を狩るための武器を。

幻想を。こいつらを還す。ただ天に魂を送るために。

それは夢、妖怪を救うためのただ今だけの。

この時だけのための武器。全ての生命を浄化する。

消えた者たちを祝福する。

そんなことは夢のまた夢。そして不可能な幻想。

だからこそ俺は想像する。

それを成し遂げるための奇跡を。

さあ今こそ

！

《実現》

！

全てをの魂を、夢を救え。

「このひと振りには救うために。」

己の心を形に。

「心刀、夢仇。。」

この刀が具現化した瞬間。

すべての妖怪は恐怖した。

自分を確実に殺すものの存在に。

それと共に安堵した。

自分を、自分達が救われる。ということに。

そして俺は動いたすべての妖怪を殺す（救う）ために。

俺は斬る。妖怪を斬る。

どれだけ血にまみれようと。どれだけ血を流そうとも。
刀を振ることだけは止めない。

屍は俺の後に。ただひたすらに殺し（救い）続ける。

そして烈火は恐れた。

己の後ろの生命に。

屍だらけの道に新たに屍を作りながら進む一つの生命に。

恐怖から生まれた妖怪が恐怖したのだ。

それと共に烈火は安堵した、

この自分を止める存在に。

今の気持ちは全くわからない。

これは恐怖（安堵）なのか。

それとも安堵（恐怖）なのか。

分からない。分からない。分からない。

自分を殺す者に感謝をすべきか？

それは違う。

では、自分を救う者に感謝をすべきか？

それはそうだ。

ではその両方の者には？

答えが出ない。

分からないのだ。今までこんな奴はいなかった。

分からない。だから狂う。

力がある。故に迷う。

だからこそ考えることが出来なくなる。

不器用ゆえに判断できぬ。

どちらにしる止まれないのだ。

もう仲間はほとんど死んだ。

ならば最後くらいは派手に行こう。

ただ前に進むために。

誰かに覚えていて欲しいから。

もう人間は殆ど月へ行っただろう。

残っているのは兵隊くらいだろう。

いや残っていないかもしれない。

しかしそんなことは考えなくていい。

俺のやることは殺す（救う）こと。

すべての妖怪（生命）に死（救済）を。

だから俺は斬る。斬って、斬って、斬り続ける。

妖怪も後僅かだろう。

そう思って進むと一回り大きな奴がいた。

おそらく、いや、絶対こいつが大将だろう。

もう周りには屍しかない。屍しか残さない。

残るは俺と屍、それだけだ。

「さあ、俺がお前を殺して（救って）やる。」

そう言うと相手は炎弾を放ってきた。

俺はそれを避けつつ近づく。

体はもう限界に近い。相手もそうだろう。

だが退けないこいつを殺す（救う）ために。

近づくと相手は火を放ってくる。

しかし俺は止まらない。ギリギリで避け、さらに近づく。

相手がさがるが間合いを詰める。

そして相手は炎弾を放ち。爆発させた。

しかし俺は前に跳ぶ。

そして爆風に乗り相手を斬る。

その斬撃は相手の右肩を捉え、右腕を切り離した。

だが相手は左手で炎弾を放つ。

どうやら右腕一本じゃ止まらないようだ。

俺は放たれた炎弾に対して突っ込んだ。

左手に霊力を纏わせて抜けたが。火傷したようだ。

しかしそのまま相手に向かって走る。

そして相手にあと2メートルのところまで相手は炎弾を放った。

避けきれない。そういう攻撃だった。

相手はもう力尽きるだろう。これは最後の攻撃だろう。

俺の体は勢いに乗っている。これじゃ絶対当たる。

そうしたら俺は死ぬだろう。

だからこそ俺は前に出た。

防御結界の盾を斜めの状態で展開して。

そして俺は相手の左肩から心臓ごと斬るように思いっきり振り抜いた。

相手はまっぴたつになった。

もう再生しないだろう。

あと俺がやることは一つ。

祈りを込める。

この刀に祈りを込める。

この屍たちが救われるように。

そう祈りを込めて、俺は刀を破壊した。

これはもう必要ない。

この刀はこの時だけのものだから。

もうここには用はない。

俺は少し疲れた。

行くところはあそこしかない。

そう思い、俺は最初にいたあの洞窟に向かった。

洞窟の周りには草が生い茂っていた。

入口がどこかは全くわからない。

とっていると、草が左右に動き始めた。

まるで道を作るように。

そこを進むと洞窟の入口があった。

周りの草はまるで主人を案内するかのように動いていた。

その通りに進むと。あれがあった。

そう。世界樹の苗木だ。

俺はこれを何百年放置したのだろう。

俺が完全に忘れていても、こいつは俺を覚えていた。

まだ1m位で幹も細いが少し育ったようだ。

そして俺は眠ることにした。

今度は少し長く眠るだろう。

そして、月から放たれたであろうものの爆音を最後に、俺の意識は途絶えた。

ただ、俺が相手を斬るとき、相手は「ありがとう」「と呟いたように見えたのは俺の気のせいだろうか。

第一章

完

『こいつはなんともまあ無茶しおったのう。』

しかしこれから寒くなりそうじゃ。

目が覚めるまで、色々サポートしてやるしかないのう。

.....それにして、

こいつの成長速度で行くと、

そのうちワシを越す日が来るのもそう遠くないかもしれんのだ。

もともとこいつには神になる素質があったようじゃし。

あと足りんのは経験と信仰あたりかのう。』

戦闘（後書き）

やっと終わりました。長かったですよ。
この次からは諏訪大戦の辺りを書きます。

オリキャラ設定

名前：烈火^{れつか}

能力：「火を操る程度の能力」

種族：妖怪

この時代の妖怪の大将。

火を操る能力だが、何かを溶かしたり、発熱が可能。

人型で身長は2mを越す。

今回の襲撃は昔から考えていた。

そのために、妖力を溜めていた。

ちなみに、今回の襲撃で妖怪は全滅したが、

人間も30%を超える被害に遭う。

はい、オリキャラ設定です。

本来。全く出す予定はありませんでした。

今回も思いつきです。

ちなみに、

私が詳しく決めてたのは主人公設定だけで。

それ以外は思いつきで書いていました。すいません。

そうなので、かなり間違ったところがあると思います。

そういった点にお気づきの方は、

感想の方に書き込みをお願いします。

目覚め

ここはとある山の中。長い間誰も立ち入らず、草が生い茂っていた。

更に、年中ぼんやり光っているものだから、

皆は「魔物が住んでいる」と言い、大変恐れていた。

だが、こんな山にも人影が。

特に草の高いところを進む一人と一匹がいた。

その一人が一匹の白蛇を追いかけていた。

「ちょっとまってください。ミシャグジ様あゝ。」

この者の名は諏訪子。こここの近くの地域を統括している神なのだが、

まだ見習いなので、力は弱い。

「ミシャグジ様。なにか見つかったんですか？」

対する白蛇の名はミシャグジ。祟り神の一種だ。

祟り神であるが人間からの信仰は厚い。

諏訪子より力が強く、所謂上司のようなものだ。

「ミ…ミシヤグジ様。ここを進めって言うんですか？」

今諏訪子達がいるのは山の頂上付近。

草の高さは一階建ての家を超える位あり、これまでの所とは違い、密度も半端ない。

草がまるで壁のように集まっている。

そしてぼんやり光る粒子の密度もほかのところとは段違いだ。

諏訪子の嫌そうな声の質問に対し、ミシヤグジは早く行けと言わんばかりに頷いた。

「ミ、ミシヤグジ様あゝ。ここ、どう進めばいいんですかあゝ。」

諏訪子はもう泣きそうである。

諏訪子たちがこの山に来たのは昼頃である。

だが、草が邪魔して進みにくかったのか、日はもう落ちかけ、夕方頃だった。

だがミシヤグジは諏訪子を気にせず、行けと言うかのように

諏訪子の背中に体をぶつけた。

「あつっ、ミシヤグジ様あゝ。い、行けば、行けばいいんですよ。」

諏訪子は消え入りそんな声で言う。

ミシヤグジは頷く。

「じゅううう。……やあっ！」

諏訪子は、そう言いつつ、思いっきり草の壁に掛けて、体当たりするよつに跳んだ。

その瞬間、

草はまるで道を作るかのように左右に避けた。

諏訪子は飛び込んでいる。

「……………へ？」

？ゴスツ？

諏訪子は突っ込んだ。

地面にそのまま突っ込んだ。

そのとき、諏訪子の頭に激痛が走るッ！

「いったああああー！ーい！ー！」

諏訪子は地面を左右に転がる。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。」「

痛いと頭を抑え連呼している諏訪子だが、ミシャグジは草が避けて作った道を進む。

「痛い痛い痛いいっ………ミ、ミシャグジ様っ！置いていかないでくださいよう〜。」

諏訪子は頭を抑えつつ後を追う。

少し進むと今までの道より広めの場所へ出た。

「ここが終わり？………ミシャグジさま？」

諏訪子はミシャグジのいる方を向く。

「ミシャグ………こんなところに洞窟？」

ミシャグジは洞窟の前から洞窟の中のほうをみていた。

そして諏訪子の方を向く。

「なんでこんなところに洞窟が？………ってミシヤグジ様、まさか進めと？」

諏訪子はこちらを見ているミシヤグジ様に聞いてみる。

するとミシヤグジはすぐに頷く。自分に拒否権はないようだ。

「わかりましたよ。行きますよ、行かなきゃいけないんでしょう。」

諏訪子はもう諦めたようだ。

ハア、とため息をつきつつも諏訪子は進む。

洞窟の中は明るかった。ぼんやり光る粒子が大量にあるからである。

「この光ってなに？」

諏訪子は疑問を持つ。

少し進むと、これまでとは違う、昼間のように明るい光を放つ場所があった。

「あそこ、何か、ある？」

諏訪子はその場所の中心に何かあるのを見つけたようだ。

「あれは………木？でもなんでこんなところに？」

そう、木だった。この洞窟の奥に一本だけ、木があったのだ。

そして諏訪子はその木に寄りかかっているものの存在に気がついた。

「あの木のそばの……………ひ、人お!？」

そう、人間だ。木に寄りかかっているのは人間だった。

「う、うそでしょ?なんで人間がここに。」

そう言いつつ近寄る。どうやら男性のようだ。

体中傷だらけで、生きているとは思えない。

「ちよつと?あなた、死んでるの?」

すこし体を揺さぶる。しかし返答はない。

諏訪子どうしようか迷っているその時。

ピクンツと

この男性の体が動いた。

.....え？

諏訪子は驚いた。死んでいると思った人間の体が動いたのだ。

「え？い、生きてる？生きてるの？ミ、ミシヤグジ様あゝ。」

諏訪子はミシヤグジに助けを求める。

だがミシヤグジは一点を見つめたままだ。

ミシヤグジは男性の体を見たまま、微動だにしない。

その時、

「.....う.....うあ.....。」

と、男性の口から声が漏れた。

「い、生きてる。この人生きてる。ねえ、起きてっ。起きてっば

「！」

諏訪子は強く揺さぶる。すると、

「お、まえ、だ、誰だ？」

と男性が目を開いた。

それを聞いた諏訪子は、

「よ、よかった。本当に生きてた……。はふう。」

と言い気を失った。

「……………と……………んで……………の？」

声が聞こえた。

俺の近くに誰かいるのかと思い、俺は体を動かそうとした。

ん？体が動かない？金縛りか？

俺の体は思うように動かなかった。

少し寝すぎたのだろうか？

もう一度動かそうとした。次は指が動いた。

「…き…き…てる…シヤク…ま」

俺の近くの人物が何か言っている。

声の高さからして女子供だろう。

俺は喋ろうとする。

「……う…うあ……。」

うまくしゃべれない。

こっぴど困っていると。

「……きて…きてっば…！」

という大きな声とともに俺に体を強く揺さぶった。

ぐえっ、脳が揺れる。

こんなことする奴は誰だ？

そう思い俺は目を開きつつ、

「お、まえ、だ、誰だ？」

と言った。

目の前にいたのは子供だった。

金色の髪の子供、髪の長さや容姿から推測するに少女だろう。

なぜこんなところに、少女が？

そう考えていると。その少女はこちらに倒れ込んできた。

そして、今ここにいるのは俺と気絶した少女と白い蛇だけのようだ。

ひとまず、時間を確認せんとな。

そう思った俺は洞窟の外に向かった。

少女と世界樹を抱えその上に蛇を乗せながら。

それにしても世界樹、今3mより低いぐらいか。

ようやく木らしくなったな。

さて、洞窟の外に来たわけだが。

草が生えまくってやがる。絶対マナ影響だな。

草の生えた場所を抜け、見晴らしのいいところに来た。

だが俺は目を疑った。何も無いのだ。そう何も。

今俺が見ている景色はただの平原。

普通なら何もおかしいとは感じないだろう。

だが、俺は違う。おかしいと思った。

ないのだ。アレがないのだ。あの跡は残るはずだろう。

月が、月の住民が放った爆弾の後は。

俺は眠る前、爆音を確かに聞いた。

でもなぜ、何も無い？

穴くらいは残っているだろう？

しかしそこで俺は気付く。自分の抱えているものに。

「おい、起きろ。」

そう言い、俺は少女を揺さぶる。

「んあ……………何？」

少女は目を覚ます。

「おい？この辺で爆発があっただろう？あれはどうなった？」

俺は少女に問いかける。

「ん？そんなこと？人間なのにずいぶん昔のことを知ってるね？

何か私が生まれるずっと前にいるんなところが爆発したらしいね。

まあ私は詳しく知らないんだけど。」

と少女が言う。

この話が本当ならば、俺はどれだけの間眠っていたんだ？

「なあ、それってどのくらい前だ？」

すると少女は、

「さあ？知らない。でも私が生まれる前だから数千年より前だと思
うよ？」

私が生まれる少し前はすごく寒くて生き物も全然いなかったらしい
し。」

なんとということだ。なら俺は氷河期を越えたってことか。

いったい何万年寝てたんだよ俺は。よく死ななかったな。

「でも運が良かったよね。私に見つけられて。」

あの洞窟じゃあ誰も見つけれないかもしれないかもしれなかったし。」

まあそこは見つけにくいからなあ。いやまて。

「ならどうして君はあそこにいた？」

「諏訪子。」

「え？」

「私の名前。私は諏訪子。いつまでも君とかお前じゃやりにくいじゃない。」

諏訪子？もしかしくなくても洩矢 諏訪子なのか。

俺はどれだけ寝てたんだ。全く。

まあそこは置いておこう。でもこっつて諏訪地方だっけ？

「で、あなたの名前は？」

向こうが名乗ったら名乗らないといけないか。

「神羅だ。創理 神羅。」

「しんら。神羅、ね。よし覚えた。」

諏訪子はそう言う。

「しかし諏訪子はなんでここに？」

「そのことだけだね。私、神様やってるの。」

諏訪子は、まだ見習いだけどね。と付け足す。

「でも神様がどうしてここに？」

諏訪子は、あ、神様の部分には驚かないんだ。と残念がって言う

「いやー。他の神様に頼まれてね。私より立場が上の神様だったし、断りにくいじゃん。で、内容はここの調査なんだ。」

なんかこの山がいつつもぼんやり光ってる。っていうことらしいんだ。」

絶対にマナの影響だろ。それ。

「それで、仕事を頼まれた私はここにやってきて神羅を見つけたって訳。」

神様にもいろいろあるんだなあ。

「で、ここに来た理由は分かったが、この後どうするんだ？」

そう言うと諏訪子は、

「うーん。とりあえず、うちに来たら？ここにいたなら泊まる場所とかないでしょ？」

と笑顔で言う。

それは正直ありがたいので、

「そつするよ。」

と言。

その後飛んで行ったのだが、俺は何故飛べたのだろうか。

「とつちやく。」

俺と諏訪子、そしてミシヤグジは諏訪地方にある神社？と言つには少し大きく感じる所へ来ていた。

「ここが私の家だよ。さ、上がって行って。」

と諏訪子が言うので建物の中へ入った。

そして、

「この部屋、自由に使っていていいからね。」

と諏訪子が俺の部屋まで準備してくれた。

「ここまでしてもらっていいのだろうか？

そう思っていますよ。」

ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト

と
と
と

子供が走ってくるような、

着信音が鳴った。非常に紛らわしい。

『聞こえとるかのう。今回の着信音は「無駄な効果音！百選！〜神
界版〜」

から選ばせてもらったぞ。』

「聞こえているが正直紛らわしいからやめてくれ。」

『まあその内のう。いや、しかし生きてて良かったのう。』

あの後かなり眠るもんじゃからわしも眠ってしまったわい。

……そろそろ本題に移ろうかのう。』

最初からそうしてくれ……………。

『では話そうかのう。』

実はお前の能力がのう。体に馴染みきつたのじゃ。めでたいのう。

それでのう。また使い勝手が良くなったと思うんじやが、

出力は80%位までに抑えとくぞ。100%以上にするのはまた別の機会にすることにしたわい。

まあそう心配するんじやない。今の力だけでも妖怪はおろかそこらへんの神だつて殺すのは容易い。

まだそのレベルなんじや。お前の能力は。あとお前の身体能力も上がつとるからのう。

少しばかり特殊なことをやっただつて大丈夫じゃから、色々試してみるといい。

あ、あと能力を使うときにわざわざ 実現 と言わんでも、

何か名前を決めとけばすぐに出せるからのう。それじゃあ、しっか
りのう。』

ふむ。技名、スペカみたいなもんか？

まあやれば出来るだろう。

ガラッ

部屋の扉が開く音がした。

「神羅！。ご飯だよ！。」

諏訪子が呼ぶ。もうそんな時間かそう思いつつ部屋を後にした。

仕事

諏訪子の家に住み始めて1週間、俺は諏訪子の手伝いをしていた。
なぜそうなったかというと

俺が諏訪地方に来た翌日。

「この辺りの地域の人ね、ミシヤグジ様を信仰してるんだ。」

「ミシヤグジ？」

「うん。神羅も知ってるでしょ。私と一緒にいた白い蛇。」

あれがミシヤグジ様の一人なんだ。」

ミシヤグジって沢山いるのか？

「一人？ってことは他にもいるのか？」

「いや？ミシヤグジ様は一人だけだよ。ただ各地に散っているんだ

よね。

「広範囲で信仰を得るために。」

「やっぱり神様にもいろいろあるのか。」

「そしてこの諏訪地方は、私が治めることになっているんだ。」

「まだ見習いだからミシヤグジ様の土地だけど、」

「私の力で土地を豊かにすることが出来るからね。」

「ミシヤグジってどんだけ強いんだ。」

「諏訪子、その力ってどういうやつなんだ？」

「んーとね、大地を操れるんだけど、創り出すことができるから、」

「そうだね「坤を創造する程度の能力」かな。神羅もなにかあるでしょ？」

「なぜそう思うんだ？」

「だってあんなところにいたんだよ。ただの一般人のわけないじゃん。」

「いや、まあそうなんだが。」

「それに神羅がもってた木があるじゃん。あれ、何か普通の木じゃないでしょ。」

まあ世界樹だからな。

「私の能力だから分かるんだけど、あの木、養分を吸うんじゃないかと、」

逆に周りに与えてるようなんだよね。だからあの山、養分が普通の山の数倍あったし。」

せ、世界樹さん。あんただんだけ凄い木なんだ……………。

「まあ、だいたいあつてるかな。」

「じゃあ教えてくれるよね？神羅のこと。」

全てばらしたほうが楽かもな。

「ああ。話そう。俺の能力は「幻想と現実を司る程度の能力」だ。」

俺の能力名、ながくね？

そう思っていると諏訪子は「？」「という感じで、」

「ねえ、それってどんなことができるの？」

まあ大体の反応はこうだろうな。俺も能力の限界とか知らないし。

「どんなことって言われても……………どんなことでも？」

「いやあ。曖昧だね。」

仕方ないじゃないか。わからないんだから。

「うーん。……………ねえ。」

「なんだ？」

「神羅の能力って私の能力の真似事、出来る？」

いきなりこの子は何を言い出すんだ。

「知らん。」

俺はそう返す。

「じゃ、じゃあさ、試してみてくれる？」

諏訪子がそう言うから試してみた。

俺たちは外に出る。そして少し広い土地に移動した。すると諏訪子が

「ここは誰も使ってなくてね、なんにもしてなかったから土地が痩せてるの。」

まあちよつと雑草が生えている程度で乾いた土地だな。

「まず私が手本を見せるから神羅も自分なりの方法でやってみて。」
すると諏訪子は地面に手をかざした。

すると、手をかざした辺りに花が咲いた。

「いま私がかやったことは、土地に栄養を与えて、植物の成長を促進させたの。」

まあ養分を与えすぎるのはあんまり良くないんだけどね。」

と諏訪子と言う。

急激に栄養を与えると育ちやすいが、植物に悪いんだろう。

「だからこうして種はまいて、そのほかも地面にまくの。」

諏訪子は、養分になるからね。と言い、花の種をまき花を枯らす。

ふむふむ。なるほど。

「まあ養分が足りないだけで種はその辺に落ちてると思うから、とにかくやってみて。」

強制的に咲かせたあとは地に戻すのか。

そう思い考える。

周りを見る。何かの種がある。また種、木の枝、種、種、………
ん？あ、あれは……。

俺は一点を見る。俺の目線の先には、倒れている木の幹、そして、

ひとつの切り株。

それを見ている俺に気がついたのか。諏訪子が

「し、神羅。もしかしてあれでやるの？」

と、聞いてきた。だが俺はそれを無視。そして切り株の近くへ移動。

その際地面に落ちてた木の棒を拾う。

「ねえ、さすがに最初にこれは難しいと思うよ？」

まあやってみないと分からないからな。

そう思った俺は地面に線を引く。切り株を囲むように。

「神羅。その木、腐ってるんだけど。」

諏訪子が言った。それを聞いた俺は持つてる木の棒を強化する。

そしてその棒を倒れた木めがけて振り下ろした。

そして砕いた木片を切り株の周りの撒いた。

これで準備は終わったか。さて、

「諏訪子、心配などするんじゃない。」

「いまからこれをどうするのさ。」

「まあ見てな。」

そう言い俺は地面に触れる。

そうだな、理想の形は森、か？それならこの切り株を中心に、

俺はこの辺が森になる映像を想像する。

そついや 実現 って言わんでもいいんだっけ？

そうだな…ならば、俺は切り株を見て、

自分の想像と重ねる。

すると木は育ち始めた。徐々に、徐々に。

横から諏訪子が

「わわっ、どうなってるのこれ！」

と言っているが気にしない。

切り株に新たな枝を生やし、育て育て育てる。

細い枝から太い枝へ、枝から幹へ、木から樹へ。

育つ育つ育つ。切り株から大樹へ。

このくらいか。

俺は顔を上げる。そこには立派な大木があった。

周りには緑があふれていた。確認を取るか。

「どうだった？これで良かったか？諏訪子？」

そう諏訪子にきく。

そうすると諏訪子は、

「どうだった？じゃないよ！なんなのさ！この状況！

成長とかのレベルじゃないじゃん！これじゃあもう再生じゃんか！」

「あー………、わ、悪かったなあ。」

「あーうー。そう言われると私が悪いみたいじゃん。」

うーん、まあいいか。

「で、これはどうするんだ？焼くのか？」

そうだったら重労働だなあ。

「………いや。悔しいけどそんなことしないでいいみたい。

養分が周りの土にほぼ均等に行ってるから。」

諏訪子は、今までの私の苦勞は……。とつぶやいている。

「まあなんとやおつと合格だね。」

合格？なんのことだ？

「さて、神羅。」

諏訪子は俺の方を向き直す。何か言いたいことがあるのか？

「神羅には私の仕事を手伝ってもらおうから。とりあえず明日からね。」

は？仕事

「なんの仕事をするって言うんだ？」

「土地の管理だよ。畑とか、田んぼとかに栄養を与えるの。」

神羅が出来るか分からなかったんだけど、ここまで出来るなら即戦力だよ。

まさか居候の身分の神羅が断つたりはしないよねえ？」

くっ………こ、断れない。

「やるしかないようだな？」

何か罫に嵌められた気がする。そう思いつつ俺は肯定の返答をする。

すると諏訪子は満面の笑顔で、

「明日からよろしくねっ。神羅っ。」

と言った。くっ、笑顔が眩しいっ。

俺はその翌日から諏訪子の仕事を手伝うようになった。

まあそんなことがあったからなんだが

「しゅんらっ。次はあそこだよ。」

隣の諏訪子は前方の畑を指さした。

「はいはい。」

「ほら早くっ。」

諏訪子はここ最近ずっと楽しそうだ。

仕事を手伝い始めて毎日、こんな感じの生活が続いている。

はじめの方は、洩矢様が男を？とか言われていたが、

それもこの一週間で慣れたようだ。順応早いな。

まあこんな感じの生活がまだ続くんだろっな。と期待する俺がいた。

「いやー。今日もお疲れ様。」

仕事を終えた俺たちは諏訪子の家に戻っていた。

「神羅が手伝うようになってから本当に楽になったよ。」

こんな会話にも慣れてきた。

能力もほとんど俺のものになってきたからなあ。

そろそろアレを試してみるか。

諏訪大戦に向けて。

主人公設定（諏訪大戦編）

名前：創理つくり 神羅しんら

性別：男性

属性：中立・中庸 特性：矛盾・混沌

能力：「幻想と現実を司る程度の能力」

能力値

筋力：B 魔力：B+（霊力、気含む。）
耐久：C 幸運：C-
敏捷：B 宝具：nothing（無使用）

神様から貰った力

1. 「幻想と現実を司る程度の能力」

2. 武器

上の1の能力に沿った内容のアイテム。
鍵型の「幻想之主」と本型の「現実之書」

どちらもそれぞれの能力に沿っているので、能力の端末としても使える。未だに使ったことがない。

3・改変・改造能力

何かに効果、属性を付加、追加したり、形状や特性を変えることが出来る。

4・世界樹の苗木

その名のとおり、世界樹の苗木、最近は順調に育つようになった。

5・神様からのオプション

身体能力や容姿、情報、助言、その他の設定等便利なものをいただいた。

技一覧

鏡面界

あらゆるものを反射する壁を展開する。

発動時には「鏡面界・展開」又は、「鏡面界・反転」と発言する。

また、半球や球体で展開した場合、内部か外部のどちらを反射するかを

選ばなければならない。諏訪大戦で使おうと思う。

不老？

諏訪子の家に厄介になって2月は経った。

俺は毎日諏訪子と共に諏訪地方の各地の村を回っている。

そしてその合間の時間で能力の確認と修行を行っていた。

ひとつ報告するものがあるとするれば、諏訪子のことだ。

そろそろ見習いから正式な神になるらしい。

まあ実際、神に見習い期間が本当にあるかは分からないが。

そして能力のことだが、前から考えていたもの。

防御結界の改良版というより発展、進化の域に近い、反射結界、あらゆるものを反射する、

そういう代物も、完成が近づいてきた。

俺は「鏡面界」と呼んでいる。

後は調整する程度で一応完成するが、まだ試作の域だ。

完璧になったら某一方さんみたいなことは容易いだろう。

まあ他にも考えているものもあるからそっちもやらないといけな
んだがな。

俺の能力についてはこの辺までにしよう。

それとこれまた俺のことだが、変わってないと思う。

ん？何がって？俺だよ。

普通なら変わるものが変わってないと思う。

変わってないと思うもの、それは容姿だ。

まだ諏訪に来て2ヶ月程度しか経ってない。が、

少しは変わるだろ少しは。

これはオヤジに聞かないといけない、か？

まあ聞いてみたら分かるか。俺の気のせいかもしれないし。

俺は端末を取り出し、親父に通信する。

「おーい。おっやじさーん。」

俺はめんどくさそうな声で話す。

『なんじゃ、そのポヤーつとした声は？』

おおつながつた。

「まあいいじゃないか。なあ一つ聞きたいんだが、俺の体、今どう

なっている?」

『なんじゃ、そのことか。そうじゃのう。まだ詳しいことは言えん。』

「詳しいこと?」

『……まあなんじゃ、おまえ、その、姿が変わらない、と思っておるの?』

「まあそういう気がするってだけなんだが。」

『姿が変わっておらんのは間違いないじゃろう。』

じゃがのう、今はまだ時期が時期じゃないと言っかのう。

そのうち、そのうち絶対話すから、それまで待っておってくれんかのう?」

ただおまえの言っように、姿が変わっていない、というのは事実と言える。

いま教えられるのはそれくらいじゃ。おまえのいる時代、諏訪大戦の前辺りじゃろう?』

そういうことなら仕方ない。しかし、

「なぜ親父がそれを知っているんだ?」

『ワシはこれでも創造神じゃ。それに、おまえを転生させるとき、

おまえの記憶を見たからのう。

ああ、でも心配するでない。思い出とかはみとらん。知識記憶のところを見たからのう。

これでも他人のプライベートを侵さぬように気を配っておるからのう。』

この親父、どこまでも都合主義じゃないか。

「まあ後々教えてくれるんらしいんだ。それじゃ時間を取ってすまんかったな。」

『いいんじゃないんじゃない。言ったじゃろう？ワシは暇なんじゃ、と。』

「そういやそうだったな。わかった。ありがとな。」

『うむ。ではの。』 プツッ

そう、か。しかし変わらないのは正直助かる。

あの腕輪が無くなって不老の状態は解けた。と思っていたが、まだ続いているとは。

これほど好都合なことはないだろう。

ならどうやって切り抜けようか。

八坂神と俺が戦うとアレだしなあ。

うっかり殺してしまうかもしれん。それは論外だ。

となると俺の標的となるのは……………フフフ。

この時の俺は楽しいことを見つけたかのように笑っていた。

しかし諏訪大戦、か。まあその内始まるさ。

仕込み

俺がここにきて2年が経過したらしい。

いま、俺は諏訪子を鍛えている。これは諏訪子が俺に言ってきたことである。

あの親父と会話した数週間後、諏訪子はこの地域を正式に統べる神になった。

そして諏訪子が受ける信仰は見習いの時とは段違いになった。

それに伴い、力も強くなったようだ。

そして、この地域で、土着神の頂点になった。諏訪子の能力の関係上、その象徴は大地。

そういう背景から諏訪子は大地を操る神として周りに認められた。

そして流れて言えば、この辺り土地の神の代表格になった。なったのだが。

立場が逆転したのだ。特にこの地域では諏訪子への信仰が厚くなりすぎ、

ミシヤグジへの信仰の厚さを超えたのだ。

だがそれはこの地域、諏訪でだけである。ミシヤグジは各地で信仰を得ている。

信仰の総量はミシヤグジの方が遙かに上を行くだろう。

だがここ、諏訪での信仰の量は諏訪子の方が上になった。

故に諏訪子は諏訪でならミシヤグジを操ることができるようになったのだ。

だが諏訪子のミシヤグジへの態度はまったく変わらない。

この形が彼女達なりの信頼関係なんだろう。

そして、諏訪子が土着神になってから、半年が過ぎた。

諏訪子は信仰を得るために今まで以上に働いている。

もちろん俺もついて行ってるが。それはいいとして、

この時期に諏訪子が俺に言ってきたことがある。

この辺の神と中央辺りの神の仲は元々良くなかったらしいのだが、

最近更に悪くなっているらしい。

そしてこちら側の代表は諏訪子だ。

向こうはこっちの代表がまだ新参者だから簡単に勝てる、と思っ
ているようだ。

簡単に信仰を奪えると考えているらしい。中央の方は軍神や武神の

類が多かったはずだからな。

まあ簡単に言うと、「あいつら最近調子に乗ってるからこっちの力で痛い目に遭わそう！」

というものである。何といういじめっ子思考。

まあそんな感じでこっちを攻めようという動きがあるらしい。

どうにか和解しようと思訪子が話し合いをしてはいるようだが。

基本的には、攻めないから信仰寄越せ。とか、無条件降伏しろというようなものらしい。

まあ相手にとって簡単に信仰を得れば万々歳だろう。

そんなことがこれまでにあったからこそ思訪子を鍛えている。

俺以外に戦える奴を知らないらしい。

もちろん俺は承諾した。

俺が最初にやったことは武器の作成だ。

戦の神に対して、素手だとすぐに負けるだろう。

だから思訪子に合う武器をつくることにした。

そうして武器ができたので、次は戦い方なんだが、
そついや俺全く知らない。

そう俺も経験は少ないのだ。

俺の戦闘経験は人間が月に行く時の1回だけだったはずだ。

それまで俺は能力の修行ばかりしていたはずだ。

結局、諏訪子と俺は修行のほとんどを模擬戦にしつつ、実戦経験を積むことにした。

ちなみに俺の武器は刀、自分の能力で作った刀と、諏訪鉄を使った短刀みたいなものを一つずつ。

俺が作ったものはなんの変哲もないただの刀だ。まあ斬ればいいからこれでいい。

ただ短刀の方は刀と言えないようなものになった。

その刀身は針よりは太いが、極限まで薄く、細くした。暗器のようなものだ。

ここまで細くしても折れないのは、諏訪子の力を込めたからだろう。

まあそつという武器でやっている。

そして形となった俺の戦闘スタイルは、2つ。

一つは速さを生かした高速戦闘型、

もう一つは後手必殺の反撃型。

そして諏訪子の戦い方は近距離と遠距離の両方できる形になった。

遠くに離れたら鉄輪を投げ、近くにくると鉄輪で殴る、みたいな、

シンプルかつトリッキーな戦法になった。それに能力や神力による攻撃が出来る。

ただ弱点があるんだがな、相手がそれを突いてこないなら勝てるだろう。

俺は今の状態でも神様殺せるらしいし、俺は主に霊力を使うだろうからな。

人間だからと油断している奴から潰すことにする。

そう思っているとき、俺に新たな疑問が生まれた。

諏訪大戦って勝っちゃったらどうなるんだ？

俺はそう思ったのだ。

諏訪子と修行を始めて一ヶ月が経ったある日、最近では諏訪子が中央の方に頻繁に行っている。

俺は気になったので諏訪子に聞いてみた。

「なあ諏訪子。中央の神たちと戦うのか？」

そう聞くと諏訪子の体がビクンッ、と跳ねた。あまりよくない状況のようだ。

諏訪子は自信がなさそうな声で言う。

「う、うん。多分そうなると思うよ……………」。

その言葉に俺は、

「そうか。」

と一言。すると諏訪子は、

「神羅。神羅は怖くないの？神様と戦うの。」

諏訪子はそう言っが、

「別に？諏訪子は怖いのか？勝てばいいだけだろう？」

俺は気にしてないかのように言う。諏訪子は、

「怖いに決まっているよ。本当に勝てると思ってるの？」

不安そうにそう言う。それに対して俺は、

「俺は勝てると思うぞ。まあ相手の力量は知らないが。」

俺はまた気にしてないかのように言う、いや気にしていない。

「どれだけ戦力に差があると思ってるの？それで勝てると思っつて、神羅は戦う気なの？」

諏訪子は変なことを言うなあ。

「当たり前だろ？なんのために俺がいると思ってるんだ。」

俺は自信満々で言う。だが諏訪子は少し考えるようにして、

「……………神羅は、戦わなくて、いいよ。」

諏訪子は今信じられないことを言った。

「なぜそんなことを言う。俺は足でまといか？」

俺はそう言う。

「いいや、神羅が居れば心強いよ。でも、でも神羅は人間じゃないか。これは神の戦い、

神羅は死んじゃうかもしれないんだよ。そうなったら私は……」

俺はそこで遮るように言う。

「大丈夫さ。俺はこんなところでは死なない。」

そう言って諏訪子の頭を撫でる。

「……あ。……で、でもそんなの分からないじゃないか！」

諏訪子はまだ俺が戦うことに反対するようだ。

仕方ない。俺はそれに逆らうように言う。

「諏訪子。俺はお前がどう言おうと戦う。もう決めたことだ。」

諏訪子は、でも。とまだ認めない気だ。

「じゃあ俺は絶対に死なない。それだけは約束する。」

すると諏訪子は、

「絶対に？絶対に死んだりしない？」

と言う。俺は、ああ。と返す。そういつと諏訪子は、

「……分かったよ。でも、神羅は後ろの方にいて。危なくなったらすぐ逃げて。」

と言う。それに対し俺は、

「……ああ。分かった。」

と言い、

「じゃあ諏訪子、相手のことを教えてくれるか？」

と続ける。

「分かったよ。相手はね、建御名方神を筆頭に血の気が多い軍神や武神たちなんだ。」

でも、八坂神とかの一部はあまり乗り気じゃないみたい。

八坂神は建御名方神の妻ってことになっているから来るだろうけど、

殆どの神は戦いの神だから、被害も凄いことになるだろうね。」

ふむ。そうか。そして俺は聞く。

「諏訪子。あとのくらいで戦うことになりそうなんだ？」

そうすると諏訪子は言いにくそうな表情で、

「あ、あははは、ごめん。一週間後なんだ。」

といった。俺は、

「諏訪子。俺はもう寝る。」

と言った。

「神羅。急にどうしたの？」

「少し眠くなつてな。諏訪子。建御名方神と八坂神の特徴を教えてください。」

「?いいけど。どうするの?」

「いや、知っておいたほうがいいと思ってな。」

そして俺は二柱の神のことを聞き、

「それじゃあ諏訪子。おやすみ。」

と言い。

「うん。おやすみー。」

という諏訪子の声を背に、部屋から出た。

ふう、息を吐き出す。俺は今自分の部屋でなく、神社の境内前の階段を降りている。

そして俺は階段の下のところ白い蛇、ミシヤグジがいるのに気がついた。

「ミシヤグジさん、か。諏訪子を頼むな。」

俺はそれだけを言う。そして俺は中央の神たちの方へ向かう。

軍神たちは大和地方に集まっているようだ。だから俺は西へ飛ぶ。

この戦いの仕込みをするために。

俺は大和地方に来ていた。俺がここにきている理由は交渉するためである。

交渉したい相手は八坂神、つまり八坂 神奈子である。

そう思い、いろんな神社を回っている。

少し里に降り休憩をしようと思って、

とある村に降りる。俺がそこで見たものは、

濃い紫の髪で、鏡を首から下げている。

諏訪湖が言っていた姿と合うような女性がいた。

酒が入っているであろう樽に囲まれて、

「なんれわらしがいかなひゃならはいおひょ。」

と言っている。

かなり酒臭く、酔っているようだ。周りの人は引き気味だ。

仕方ないから、近くの川に連れていった。

いつまでもあそこにいると周りに迷惑だろうからな。

俺は背中の八坂神をそのまま川へぶん投げた。

すると綺麗な放物線を描き、八坂神は川へ頭からIN。

その数秒後、

「ブクブクブクブク……………ぷはあつ。だ、誰だあ！私を川に投げたのは！」

どうやら酔いは冷めたようだ。

「あんたかい？私を投げたのは。人間のくせに…あんた人間かい？
見ない顔だね。」

「人間だよ。そして俺がお前を投げた。」

「あんた、命知らずのようだねえ。私を投げるなんて。人間のくせ
に私にこんなこと。」まで、八坂神」

なんで私の名前を知っているんだい？」

「まあ聞け。八坂神。お前に用がある。ただお前が酔っていたから
川に投げただけだ。」

これは当然の処置だ。俺は悪くない。」

「何か納得できないねえ。まあこのことはお互い様として不問にし
よう、で、用って何なんだい？」

「ああ。諏訪の方の神との戦いについてなんだが。。」

そこまで俺が言った時八坂神の威圧感が膨れ上がった。

「なぜ人間がそのことを知っている！人間、お前は何者だ！」

おお。これが威圧感か。

「なあに。普通じゃない人間だよ。それに、俺はただ交渉をしにき

ただけだ。」

そう言うと威圧感が消える。

「交渉だった？」

「ああ。交渉だ。交渉しようじゃないか八坂神。」

「……………話くらいは聞いてやる。」

八坂神は信用してないような声で言った。

「まずは俺のことを話そう。俺は創理 神羅。」

あんた達の敵、諏訪地方の洩矢神のところまで厄介になっているものだ。

今回は戦を行うにあたっての交渉をしにきた。」

俺は自分の要件を伝える。すると八坂神は驚いた表情で言った。

「ちょっと待ちな。あんた、戦を止める気がないのかい？」

その質問に対し俺は即答する。

「ない。だからこそここに来た。」

「それで何故私のところなんだい？」

「ああ。諏訪子。洩矢神からあんたは乗り気じゃなさそうって聞い

たからな。

攻めようとしてる奴より話がしやすいと思ってな。」

ここで八坂神は少し考えて言った。

「……一応そちらの要求を聞こうじゃないか。」

よし。

「それは助かる。それじゃあ言おう。こちらが、俺が出す要求はただひとつ。」

諏訪子と、洩矢神と一対一で戦って欲しい。」

俺はただそれだけ言った。八坂神の反応は、

「はあ?」

というなんとも気の抜けたものだった。

「ん?聞こえなかったか?じゃあもう一度言うぞ」「それだけかい?」
ああ。」

「それでいいのかい?洩矢神は戦好きじゃないんだろう?」

「ああ、それで構わない。諏訪子も出来るだけ戦いたくないだろうしな。」

「それじゃ尚更ダメじゃないのかい？それに私の他の神のことはどうするのさ。」

「そいつらは俺が潰す。」

そう言うと八坂神は、

「ただの人間がそんなことできるのかい？」

といった。それに対し俺はニヤリと笑い、

「ああ。任せておけ。」

と言った。八坂神は、

「そこまで言うなら任せるけど、私には洩矢神と一対一で戦う理由がないよ。」

「そこはまあ、諏訪の刺客から攻撃を受けた。とでも言え。証拠用にこれを渡しておく。」

と言って俺は諏訪鉄で出来た短刀を差し出す。

「これは……洩矢神の神力かい？まあこれならどうにかなるだろうね。」

「それを使ってもらって構わない。それに俺は一対一の戦いの邪魔はしない。」

受けてくれるなら俺はこのまま帰らせてもらおうが、どうするっ。」

俺が言うと八坂神は、

「受けてやるっじゃないか。その要求。」

と返答した。そして俺は礼をし、諏訪へ向かった。

その際に八坂神は俺に、

「じゃあ、神羅。また会おうじゃないか。それと私の名は八坂神奈子だよ。」

と言われた。

諏訪大戦まで、あと5日。

その頃諏訪子は、

「あーっ！。今日も神羅、帰ってこなかったな……。。」

と呟くのであった。

諏訪大戦まで後3日、俺は神奈子のところから、二日かけて帰ってきた。

もう人間の避難は終わっている。

決戦までもうすぐ、と言うことで、各地から神様たちが集まっている。もちろんミシヤグジもいる。

俺はそこに帰ってきた。

「諏訪子ー。ただいまー。」

と言って部屋の扉を開けた瞬間、

「しーんーらーっ!」

と言いつつ諏訪子が体当たりしてきた。

「神羅。神羅っ。神羅あ。今までどこ行ってたのさ。心配したんだから。」

と諏訪子が言う。どうやら心配していたようだ。俺は、

「悪かったな。ちょっと用事があったから遠くに行ってたんだ。」

と言いつつ諏訪子の頭をなでる。諏訪子は気持ちよさそうに細め、

「でも帰ってきてくれて本当に良かったよ。」

と言う。安心してるようだ。

そして迎える決戦の日、

諏訪大戦 開戦

。

当日、俺と諏訪子は会話していた。

「どうやら始まるようだな。」

「うん。結局こつなっちゃった。けど、神羅は下がってて。」

「ああ。」

俺は言われたとおり後ろの方へ下がる。

そろそろか。

向こうの方から何かの大群がこちらへ向かってきている。

その数は俺たちの3、4倍はあるほどだ。

大群がある程度のところで止まり、誰かが前に出た。

それに合わせ諏訪子も前に出る。

相手は神奈子だろう。諏訪子は驚いている。

二人は会話というか舌戦だな、それをしつつ戦闘態勢に入っていた。

俺もそろそろ、と思い。こっさり前に移動する。

俺もそこで戦闘準備をする。神奈子が諏訪湖に何か放り投げた。

それを受け取った諏訪子の表情は驚愕と何か謎が解けたようだった。

そして二人の力が膨れ上がり、互いに攻撃を放った。

それが開戦の合図なのか、両軍は一斉にぶつかり合う。

状況はこっちが圧倒的不利だ。諏訪子は神奈子の相手で精一杯だろう。

そのことも考えつつ俺は、

そろそろかと思いつつ、発動する。

相手の神を潰すために。

《鏡面界》、発動。

その瞬間、相手の方を何か包む。さあ、

祭りはまだまだ始まったばかりだ

。

敗北

「はあ、結局こうなっちゃったよ。」

神羅を後ろにさげた私は、こうなったことに後悔していた。

向こうから来ているのは相手だろう。それを建御名方神が率いているはずだ。

その大群の数は私たちの三倍以上だ。その大群は私たちの前に止まり、代表が前に出てきた。

出てきたのは建御名方神……？じゃない？あの神は……、や、八坂神！？なんで！？

「やあ洩矢の。元気そうじゃないかい。」

なんで八坂神が？八坂神は戦うのに乗り気じゃなかったはず。

「な、なんで八坂神がここに？」

「分からないのかい？まあ自分の下の管理もできない奴に言っても意味ないだろうねえ。ほらっ。」

八坂神は何かの包みを投げしてきた。それを見ると……。こ、これは！

それは私の神力の込められた短刀のようなものだった。

こ、これ、神羅の作った武器じゃん。でもなんで八坂神が？

「それは5日くらい前に私の方に飛んできたものだよ。私の心臓めがけてね。

でもそれを投げた奴は、失敗したことに気づいたのか直ぐに去っていったよ。」

5日前。ちょうど神羅がいなかったときだ。神羅は相手の戦力を削ぎに行ってたのかな？

「それには洩矢の、あんたの神力が込められていたからねえ。

こんなもの持つてるのはあんたのこの奴位しかいないからねえ。

ま、こんなことされたら私も怒るよ。だから今回は私があんたと戦う。

安心しな。私の他の神はあんに危害は加えない。あんと私での一騎打ちだ。」

これは最も簡単で危険な賭けだろう。でも総力戦は確実に負けるなら、と思い私は構える。

「おっと、ようやくやる気になったようだね。そうこなくっちゃ。」

八坂神も構える。やるしかないようだ。私と八坂神は神力を練る。

私は鉄輪を、八坂神は大きな柱を、双方が同時に放った。

それと共に両方の軍勢が動き始めた。

状況はとても悪い。相手の軍によって私たちは敗戦必死だ。

私は八坂神一人だけでいっばいっばいだ。

そんな圧倒的不利な状況の中、ひとりの声が戦場に響いた

《鏡面界》、発動。

その言葉と共に何かに相手の軍勢が包まれる。

声の方向を向くとそこには、自分が後ろにさがらせたはずの、神羅が立っていた。

さて、こっちの戦力はあと僅か。

しかし諏訪子と神奈子の戦いが長引けば長引くほどこっちには好都合だ。

今使った鏡面界の設定は両面展開。それを相手を囲むように張っている。

中の奴らは少し戸惑ったりしたが、すぐに持っている武器で叩き始める。

だがどうにもならない。なかにいる奴らは次第に疲れ、肩で呼吸しているものもいる。

もうすこし追い詰めるか。そう思い俺は唱える。

《鏡面界：内部反転・球形展開》

俺の手の中にサッカーボール程度の大きさの球が現れる。

俺はそれに向かって霊力弾を放つ。そしてそれに向かって連続で霊力弾を放つ。

すると中の霊力弾はどんどん細かく分かれる。俺はそれを繰り返す。

そして俺は改変する。霊力を強く。そして硬く。

俺はそれを相手に向かって投げる。そして能力を解く。

すると球の中の無数の霊力弾は周りを傷つけようと飛ぶ。

その霊力弾でたくさんの神を傷つける。ただし殺せない。

だがそれが狙いなのだ。無数の弾は例外なく神々の体力を奪う。それが本来の目的なのだ。

疲労のたまっている神はこの攻撃により、更に披露が溜まる。

神力は沢山あっても、どれだけ力が強くても、疲労が溜まれば必然的に動きは遅くなる。

そう、神羅はこの時を待っていた。神羅の戦闘スタイルの一つは高速戦闘。

だから回りくどいこの方法を選んだ。

仲間が少なくなり、なおかつ相手の動きが鈍い、自分の動きやすい状況を作ることを選んだ。

この方法は相手の体だけでなく、心にもダメージを与えられる。

動けない自分に近づく敵、まさに死が自分に近づく感じだろう。

そして俺は好機とばかりに駆け出す。自分の刀を持って。

そして一瞬のうちに背後に周り、相手の胸を水平に斬る。

その次の奴は首、その次のは心臓、そのまた次は肩からの斬り下ろし。

次々に神の肉体を斬る。次々に生命力を奪う。

神の大群をただの刀で切り伏せる。何千、何万と斬る。

そして俺は最後のスパートをかけるように言葉を紡ぐ。

《私の体は光のごとく、何よりも早く。私の体は神にも見えぬ。》

そう唱えた後は誰にも見えなかったであろう。

気がついたときには斬られていた。そう感じるだろう。

この時、ここにいた全ての神々が、一人に、ひとつの存在に敗北した。

それと共に終わる。この戦いは終わる。諏訪子の負けという結果で。

そう、

諏訪子の負けという結末で。

（終わったか。）

戦後処理

さて。諏訪大戦が終わった次の日、俺は諏訪子と神奈子の前で正座していた。

「どういふことが、色々説明してくれるよねっ。」

諏訪子はニツコリと笑いながら言う。だが目が笑っていない。

諏訪子の隣にいる神奈子はカタカタと震え、目を逸らしている。

こんなことになったのは昨日のことが原因である。

諏訪大戦終戦直後。俺は諏訪子と神奈子のところへ行った。

「し、神羅あ。ごめんっ。本当にごめんね。負けちゃったよう。」

諏訪子は本当に申し訳なさそうに言う。だが俺の返答は、

「ああ。別にいい。諏訪子が絶対負けると思ってた。100%負け

ると、戦う前から分かった。」

こういうものだった。ここから次のような会話が続く。

「え……。でも、神羅は勝てると思うって言ってたじゃん。」

「ああ。言ったな。俺。」は勝てると思っつて。現に俺は勝ったぞ?」

「ええええええええ！じゃ、じゃあ神羅は負けると分かっつていて私を戦わせたの?」

「そういうことになる。」

「じゃあ神羅は何が目的だったの?」

「俺の目的か?一応神を殺すことだが?」

「なんのために?」

「この刀に神様の血を吸わせるためだ。」

「そのただの刀?そうしてどうしたいの?そんな刀じゃ神様は死なないでしょ。」

「ああ。だからこの刀なんだ。神を斬り、その血を吸うことでこの刀を殺せるほどになった。」

話が脱線している。

「ちょっと。話がずれてるよ。洩矢の、あんたは神羅に何が聞きたいんだい？」

「おっとつと、そうだったね。ってなんであなたが神羅を名前で呼んでるの？」

「襲われたんじゃないの？」

「うーん。まあそこから話してあげようじゃないか。あの話は嘘だよ。」

「私は襲われて何かないし、あんたと戦ったのも神羅に言われたからだしね。」

「大体、沢山の神を殺せる程の実力の神羅が私如きを仕留め損なうことなんてありえないよ。」

「じゃああの包みは？」

「あの变に細い短刀かい？あれは神羅から直接受け取ったものだよ。その時に交渉したのさ。」

「洩矢神と一対一で戦って。何体の神を相手どるより、一体の方が楽だし楽しいからねえ。」

「私はすぐ承諾したよ。……それにしても、神羅には敵いそうにないねえ。」

「なんでそう思うのさ？」

「なんでって、交渉の時だって、あの短刀、あれはあなたと戦う理由作りのためのものと考えて、

戦前の人たへの態度、戦時のあの膜、攻撃、そしてその刀まで、全部神羅の手のひらの上で踊っていたこのようなこの展開。

おおかた神羅は、戦の後についても予想がついていたと思うよ?」

「戦の後って、神羅。いまのって本当なの?」

諏訪子は聞いてくるが、神奈子が、

「それはあとで聞くといい。それよりみんなが起き始めるよ。」

その言葉の後に続くように周りの神達が起き始める。

そしてその後、戦後対談があったのだが、神奈子を残し、残りの神は帰っていった。

信仰が根強く、全然受けられないからだそうだ。

神奈子が帰らないのは、向こうがつまらないからだそうだ。

それに、諏訪子に唯一勝ったから。敗者は勝者の言うことを聞くのが普通。

と言いながらここに留まっている。

そういうことがあり、長い一日が終わった。

という事で話は冒頭に戻る。

諏訪子と神奈子は互いに名前で呼び合うようになった。

朝起きると、目の前に諏訪子がいた。そしてすぐに神奈子のいる部屋まで引きずられ、今に至る。

諏訪子の目はマジだ。言わないといけないだろう。

とりあえず今一番言わなければならないことは一つ。正座の体勢から頭を下げ一言。

「すみませんでした。」

そう謝った。そして俺の仕込みの全てを話した。

説明し終わってから神奈子から質問があった。

「ねえ神羅。あんた。私たちが諏訪子から信仰を奪えないこと、分かっていたかね？」

それに対する俺の返答はもちろん

「ああ。そこまで想定内だ。」

すると神奈子は俺の想像を超える行動をした。

「そうかい。でもこれは想定外だろう？」

神奈子はそう言い、俺に

。

キスをした。

その時空気が凍った。そして俺は神奈子に聞く。

「神奈子。おまえ、何で……………」。

「分からないのかい？私はあんたの、神羅のことが好きになったんだよ。」

自分より強い者に惚れることのなにが悪いんだい？

「いや、でもおまえ、夫がいるんじゃないのか？」

「夫？…………あのジジイのことかい？あれは形だけのものだよ。」

誰が好き好んでジジイの妻になるんだい？

神羅は私より強い。おまけに顔も悪くない、むしろいいほうじゃない

いか。

惚れる要素としては十分だと思うけど？」

「いやでも俺なんかでいいのか？」

「ああ、面倒だね。」

神奈子はそういい、また俺の口を自分の口で塞ぐ。

「私は神羅のことが好き。それだけの簡単なことじゃないか。

逆に聞くけど神羅は私のこと嫌いなのかい？」

「いや、むしろ嬉しい。そして多分俺は神奈子のことが好きなんだろ。」

俺は神奈子から告白され、その返事を述べていると。

俺の横から、「だめー！」という声と共に何かがぶつかってきた。

「いくら神奈子でもだめっ！神羅は私のものなんだから。神奈子には渡さないからね。」

いつからそういうことになった。

「ふーん？諏訪子のもの、ね。」

神奈子は面白いことを思いついたような表情だ。

「ねえ諏訪子。神羅があんたのものって言うなら、私に出来ないかい？もちろん断らないよね？」

大戦後の立場を利用する気らしい。こうなると諏訪子は断れないので、

「わー！わー！今さっきの無し。私は何も言ってない。」

と言い、無かったことにした。

「じゃあ問題ないじゃないか。」

そう神奈子が言う。立場も口も神奈子の方が上手みたいだ。それに
対し諏訪子は、

「だめだめだめだめえ。神羅は私のものなのぉ。」

諏訪子はその姿に合うくらいの子供みたいになった。神奈子は面倒
そうに、

「じゃあ聞くけど諏訪子。あんたは神羅のこと、どう思ってんだい。」

そう聞く。諏訪子は、顔を真っ赤にして、

「ど、どう思ってるって、そりゃ、あれだよ？わ、私も、ね？」

言いにくそうにしている。ここまでだと流石に俺も分かる。すると
神奈子は、

「はっきり言いなよ諏訪子、好きなの？そうじゃないの？」

神奈子がそう言うと、諏訪子は顔から湯気を出しつつ

「わ、私も…、私も神羅のことが好きっ！神羅のことが大好きっ！」

諏訪子は大きい声ではっきり言った。そして神奈子は、

「さて神羅。諏訪子のことはどうするんだい？」

そう言われ、俺は諏訪子にキスをして、抱きしめた。そして、

「俺も諏訪子が好きだ。愛してる。」

そう言う。すると諏訪子の瞳から涙が零れる。そして神奈子が、

「さて、神羅。あなたは今、二人の女性に告白したんだ。

そうしたってことは。どちらも愛して、幸せにしてくれるんだろう？」

と言った。望むところだ。

「ああ。分かっている。」

俺はそう言い、二人を抱きしめた。その時に神奈子と諏訪子が、

「でも、私たちが惚れたんだ、なんかこれから色んな奴が好きになりそうだねえ。」

「あ、それ、なんかありそうだね。まあ、だからこそ私は好きになつちやつただけだ。」

「違うないねえ。…もしそうなら迷わなくていいよ。神羅の好きに愛するがいいさ。」

ただし！私達も同じように愛して、幸せにしてやりな。諏訪子もそれでもいいね？」

「うん！全然いいよ！神羅なら何人愛しても、絶対に全員を幸せにしてくれると思うから。」

「神羅、責任重大だねえ。ま、頑張りなよ？」

という二人の心の広さを感じた。

そしてその夜二人を抱き、3人同じところに寝た。

次の朝は腰が少し痛かったが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9490z/>

規格外の行く道（仮）

2012年1月2日03時53分発行